



【入選作品】突然の別れに、保険が残してくれた安心

40代後半のご夫婦から、保険の更新に伴う見直しのご相談をいただきました。

高校1年生のお子さまがいらっしゃることから、「家族が困らない保障を準備したい」とのご要望でした。

ご主人は、死亡・医療・がん・貯蓄性の保険に、専業主婦の奥さまは、医療・がん保険にご加入いただきました。

また、ご主人には持病があり、住宅ローンの団体信用生命保険（団信）への加入が難しかったため、収入保障保険で対応可能な会社を探し、無事にご加入いただくことができました。

「気になっていたことが解消できてよかった」と、ご夫婦で喜んでくださったのを覚えています。

それから約3年後、奥さまから「主人が亡くなったので、保険金の請求をしたい」とご連絡をいただきました。

あまりにも突然の知らせに、私自身も言葉を失いました。

後日、必要書類を持ってご自宅へ伺いました。

ご葬儀も終え、少し落ち着いた奥さまは、亡くなられた時の状況を静かに話してくださいました。

原因は、持病とは関係のない心臓の疾患だったそうです。

前日までは元気に過ごされていたとのことですが、お風呂上がりに倒れ、そのまま帰らぬ人となってしまったと伺いました。

お話を聞きながら、私も胸が締めつけられる思いでした。

それでも、請求手続きのご説明を進める中で、奥さまはこうおっしゃいました。

「残してくれた保険金のおかげで、私と娘は不自由なく生活できそうです。ありがとうございました。」

この言葉に、つらい気持ちを救うことはできなくても、経済的な不安を取り除くことができたのだと、保険の力を改めて実感しました。

人生は、いつ何が起こるか分かりません。

だからこそ、保険は“もしも”に備えるだけでなく、“その時”に支えとなる存在なのだと、強く感じた出来事でした。